



ハーバード大学客員教授になられた恩師の岸先生（左）と同行した筆者（右）の記念写真（1972年撮影）

「ひよつとしたら私には化学の才能があるのではないか?」と思いはじめたのは、中学の化学実験のときであった。愛知県安城市で生まれ育った私は、隣接する岡崎市の中

学校に通っていた。理科の実験中に、深津周一先生に「福山、うまいなー!」と、何をやったかは思いだせないが、何度も褒められた。生来うぬぼれの強い私という“豚”は、ここで完全に木に登ってしまった。

こうして「化学好き(?)」になった私だったが、県立岡崎高校2年生のときにがっかりした。なぜなら当時、文系の生徒は化学実験をさせてもらえるのに、理系は大学でやれるからという理由で、実験の時間がなかったからだ。実験のない化学なんて何が面白いものかとふてくされはしたが、中学のときに刷り込まれた「化学的才能のもち主」という自覚を捨てることはなかった。その頃化学に関する本を読んでいて、高分子化学が面白そうだと思い、ポリマー研究で最先端に行く京都大学工学部を受験しようと心に決めた。

私が高校生の頃までは、近所に名古屋大学の農学部があり、毎週木曜の夜に何人かの先生が画家である親父に絵を習いにきて、その後はいつも酒盛りになった。「ひよつとしたら高分子化学は面白くないかも...?」と思いはじめていた私は、ある日、すでに酔っぱらっていた農業化学の教授であった宗像桂先生に、どんな研究をされているのかを尋ねてみた。先生はニコニコしながら、稲の害虫のメスから発散さ

れる有機化合物によって何kmも離れたところからオスが誘引されてくるとい、昆虫フェロモンの話を構造式を書きながら聞かせてくださった。私はその話にすっかり魅了され、その場で「先生、弟子にしてください!」と、名古屋大学農学部を受験することにしてしまった。今から思えばいぶん単純な高校生で、将来は宗像先生の跡取りになるつもりであった。

その後、希望どおりに名古屋大学農学部に入學した。学部3年になり、いよいよ講座配属が近づいてきたある日、岸義人助教授（現ハーバード大学教授）が学生実験室に入ってこれ、私の前に立った。そしていきなり「僕のところに来たら君の将来はこうなるよ」と、バラ色の未来について語りはじめたのだ。当時、岸先生は講義を担当されていなかったもので、面識はないに等しかった。私は、いきなり天から降ってきた話で面食らってしまい、こまかいことは覚えていないが、こんなに自信に満ちあふれた人は今まで見たことがないという強烈な印象が今でも残っている。宗像先生の弟子になろうと思って名古屋大学に来たが、岸先生の魔力というか魅力の虜になってしまった私は、こうして後藤俊夫先生が主宰する生物有機化学研究室の一員となった。フグ毒テトロドトキシンの全合成に参加して世界最先端の有機合成を経験したのち、岸先生に従ってハーバード大学に留学し、そこで出会った多くの優秀な研究者たちのおかげで現在の私があると思っている。

だから、先のことは誰にもわからないが、自分が面白いと思ったことを一生懸命やれば、かならず道は開けてくる...と気楽に考えるのが一番ではないでしょうか。

面白いと感じたものを 一生懸命にやろう!

（東京大学大学院薬学系研究科）
福山 透
ふくやま とおる